今週の為替相場見通し（2023年2月20日）

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	（円）		131.11 ～ 135.12	134.15	132.50 ～ 136.00
ユーロ	（ドル）		1.0613 ～ 1.0805	1.0695	1.0630 ～ 1.0720
（1ユーロ=）	（円）		140.39 ～ 143.67	143.53	141.00 ～ 144.50
英ポンド	（ドル）		1.1915 ～ 1.2269	1.2043	1.1800 ～ 1.2300
（1英ポンド=）	（円）	*	158.30 ～ 162.18	161.49	156.00 ～ 163.00
豪ドル	（ドル）		0.6812 ～ 0.7030	0.6879	0.6650 ～ 0.7000
（1豪ドル=）	（円）	*	90.70 ～ 93.05	92.28	90.50 ～ 94.50

（データ）先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1．米ドル

市場営業部　為替営業第二チーム　上遠野　暁洋

（1）今週の予想レンジ：　132.50　～　136.00　円

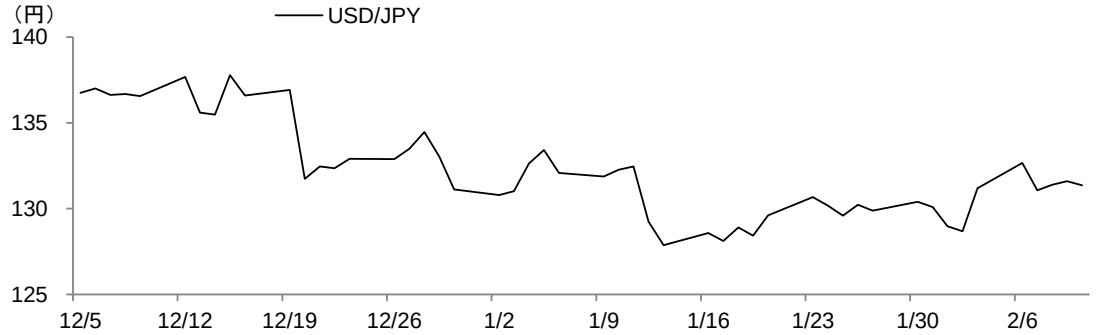
（2）ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は上昇し、約2か月ぶりのドル高水準を付ける展開となった。週初13日131.54円でオープンしたドル/円は海外時間に132円台後半まで上昇。前週10日に政府が日銀新総裁として植田氏を起用する方針を示し、同氏からも緩和の継続が必要とのコメントがあったことを踏まえ、日銀新体制での早期の金融緩和修正期待が後退し円売りが強まった。ドル/円はNY時間に132.91円まで上昇するも133円を前に売り戻され132円台前半でNYクローズ。翌14日は海外時間からの流れを引継売り優勢となり132円を割り込む展開。もっとも、その後は米1月消費者物価指数（CPI）を控えて様子見ムードとなり132円を挟んで方向感に乏しく推移。注目の米1月CPI発表直後は荒い値動きとなるも、総合・コアベースともに市場予想を上回ったことからFRBによる利上げの長期化が意識され、米金利上昇に連れる形で133円台前半まで上昇する展開となった。15日は東京朝方132円台半ばまで下落する場面があったものの、一巡後程なくして133円台を回復。海外時間には、米1月小売売上高や2月NY連銀製造業景気指数が市場予想を上回ったことを好感し、米金利上昇とともに134円前半まで上昇した。翌16日も売りが先行し133円後半まで下落も、海外時間には米1月生産者物価指数が市場予想を大きく上回る強い結果となった他、FRB高官のタカ派発言を背景に上昇た。17日、134円台前半でスタートしたドル/円は朝から買いが優勢となり仲値後には134.50円を超え134円後半での推移となった後、海外時間には135.12円と約2か月ぶり高値圏まで上昇する展開となった。もっとも、米国連休を前にして節目達成感からその後は伸び悩み、134.15円で越週した。

今週のドル/円相場は上値の重い展開を予想。24日（金）には本邦1月全国CPIの発表を予定しており週末にかけての荒い値動きに警戒。前回12月のコアCPIでは前年同月比で+4.0%と1981年以来約41年ぶり高水準となった。主因である原材料高や円安、エネルギー高は依然落ち込みが見えない中で、一段の上昇となれば日銀の目標水準+2%を10か月連続で上回り、現行緩和策維持への修正期待が再燃する可能性もあろう。また、同日、衆議院運営委員会にて植田氏が所信聴取に臨む予定であり注目が集まる。基本的に直近発言通り緩和継続の必要性を貫くものとみられるが、理論派として知られる同氏だけに、足元止まらぬ物価上昇やYCC副作用への指摘に対して独自の見方を覗かせる可能性も否定できずヘッドラインに要警戒。その他経済指標としては、21日(火)米1月中古住宅販売件数、22日(水)FOMC議事要旨（2月会合分）、24日(金)米1月個人所得/支出、1月個人消費支出（PCE）デフレーター、米2月ミシガン大学消費者マインド(確報値)の発表などを予定。

（3）先週までの相場の推移

先週（2/13～2/17）の値動き：　安値 131.11 円　高値 135.12 円　終値 134.15 円



（資料）ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 グローバルFIチーム 大橋 開

(1)今週の予想レンジ: 1.0630 ～ 1.0720 141.00 ～ 144.50 円

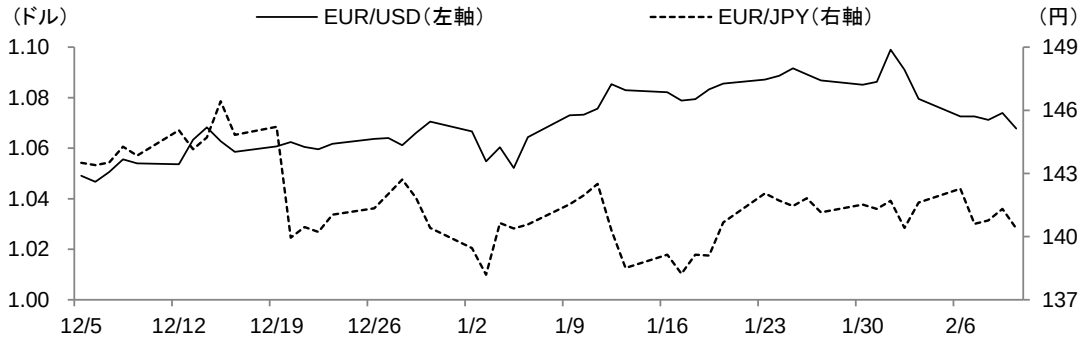
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は、小幅上昇。週初1.0679でオープン。米金利が低下したことや欧州株の堅調推移がユーロ買いをサポートし、一時1.0730近辺まで上昇。14日、持ち高調整でドル売り優勢となる中、1.0750近辺まで上昇。その後、米1月消費者物価指数発表直後に週高値となる1.0805まで上昇する場面も見られたが、長続きはせず1.0707近辺まで下落。ユーロ/円の上昇にサポートされ下落圧力は後退し、1.0737近辺でクローズ。15日、米1月小売売上高、2月NY連銀製造業景気指数が堅調な結果だったことを受けて、ドル買い優勢な展開。16日、米生産者物価指数が市場予想を上振れたことからドル買いが進行し、1.0655まで下落。その後は、1.0700近辺まで値を戻すもブラード・セントルイス連銀総裁の”3月に+50bpの利上げ支持する可能性を排除しない”とのタカ的な発言を受けてドルが買われ、1.0670近辺まで下落。17日、時間外取引にて米長期金利が金利上昇していた中、米株先物が下落したこと等から1.0613まで下落。その後、ビルロワドガロー仏中銀総裁から”3月の会合より後の行動はそれほど緊急ではない、利上げも今年でないことは確実”とのハト派な発言を受けて欧州株は上昇、ユーロ/ドルは1.06台後半まで上昇し、1.0695で越週した。

今週のユーロ/ドル相場は、欧州金利低下に伴う株安から小幅下落する展開を想定。先週の欧州金利は他国金利動向、ECB理事シュナーベル氏のタカ寄りの発言(“現在インフレは過少評価されており、一段と引き締めを行う可能性”)、ビルロワドガロー・仏中銀総裁のハト寄りの発言(“3月の会合より後の行動はそれほど緊急ではない”)等により一喜一憂した。ただ、次の要因から短期的に、欧州金利低下・株下落・ユーロ/ドル下落のシナリオを想定。足許ECBのターミナルレートは3.75%まで織り込み、独10年債利回りは2.55%をタッチ(2022年末とほぼ同水準)する中、ユーロインプライドボラティリティは米国対比低位で推移している点などである。一方で、リスク要因としては、主に2点挙げられる。①今週のユーロ圏2月製造業/サービス業PMIは、前月対比堅調な結果がコンセンサスなものの、市場予想を上回るほどの凄まじく堅調な結果の場合、②先週末に見られたように、欧州金利が金利低下する中でも欧州株高となりユーロ/ドルが買われる場合などである。

(3)先週までの相場の推移

先週(2/13～2/17)の値動き: (対ドル) 安値 1.0613 高値 1.0805 終値 1.0695
(対円) 安値 140.39 高値 143.67 終値 143.53



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

欧州資金部　神田　史彦

(1)今週の予想レンジ:　1.1800　～　1.2300　　156.00　～　163.00　円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

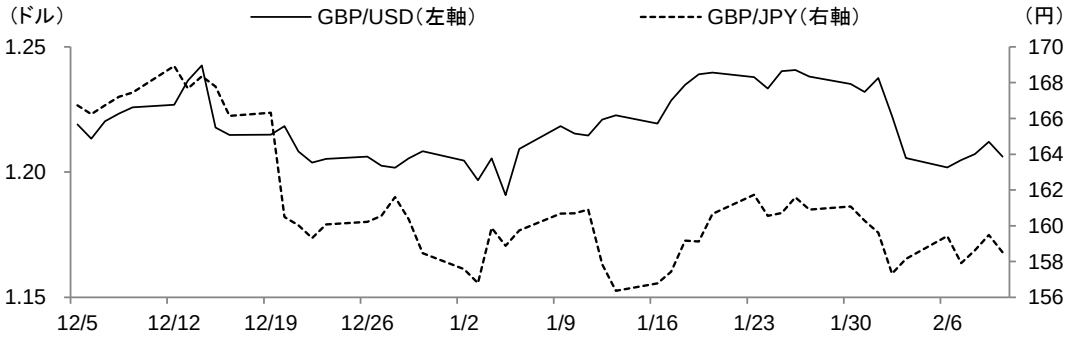
先週の英ポンド相場は、英米の経済指標で振れたものの、対ドルで若干の下落。週初13日は、対ドルで1.20台半ばで始まる。特段の材料はポンドへなかったものの、日銀人事に絡む思惑で円が売られクロス円が上昇したのにつれて、1.21台まで買われる。14日は朝方の堅調な英1月雇用統計を受けて1.22台へ。米1月消費者物価指数が予想通りとなると上下に大きく振れ、2週間ぶりに1.22台後半を記録する場面もあったが1.21台へ収束。翌15日には英1月消費者物価指数が予想以上の減速となったことで1.21を割り込む。午後に米1月小売売上が予想を上回った伸びとなるとドル買いが加速し一時1.19台まで下落した。16日は1.20台半ばで始まるが、米1月生産者物価指数が予想比上振れたことでドル買い。再び1.19台に下落した。週末17日もその流れは続き、予想を上回る英1月小売売上が出たものの、1.19台前半へ値を下げた。しかし米国勢参入後は米金利低下でドルが弱含み、1.20近辺へ値を戻して欧州時間を終えた。この間、対円ではドル/円の上昇を受けて概ね堅調。159円台で始まると14日NY時間には162円台まで上昇。その後のポンド弱含みの中でもドル/円の上昇がけん引し、161円を挟んだもみ合いとなり週末を迎えた

今週の英ポンド相場は、上値重い推移継続を見込む。先週は堅調な英雇用統計に市場の素直なポンド買いが見られたのはやや驚きではあったが、勢いが続かなかったのは想定内。基本的には米国発の動きの方が大きくなるとはいえ、英国や欧州におけるエネルギーひっ迫の危機感が和らぐ中で、インフレ圧力が弱まることによる英中銀のハト派化、よりも英景気の低迷によるリスクの方が嫌気されるとみている。それを占う英2月の各種景況感指数が21日(火)に発表される。いずれも好悪の基準である50を引き続き下回ることが予想されており50超えのサプライズがなければポンド買いにはつながらないだろう。対円では、やはり注目は24日(金)に予定される植田日銀総裁候補の所信聴取か。明確な引締・緩和のメッセージが出される可能性は低いとみているが、流れるヘッドラインの断片で上下に振れる可能性はある。すでに日銀のタカ派硬化のリスクはだいぶ消化されているため、警戒されるのは円高リスクか。その場合はドル売り圧力から間接的にポンド買いが見られそうだ。

(3)先週までの相場の推移

先週(2/13～2/17)の値動き:

(対ドル)	安値 1.1915	高値 1.2269	終値 1.2043
(対円)	安値 158.30	高値 162.18	終値 161.49



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

市場営業部　為替営業第二チーム　小林　元子

(1)今週の予想レンジ:　0.6650　～ 0.7000　　90.50　～　94.50　円

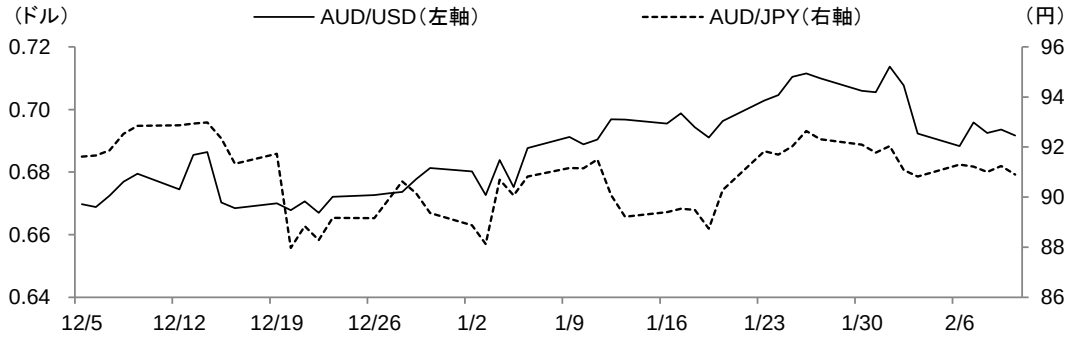
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は週後半にかけて下落した。13日、米金利が高止まりする中、中国株が大きく下げてスタートすると、豪ドルは一時0.69割れとなり0.6890まで下落。その後しばらく0.6910近辺で小動きでの推移。NY時間は米1月消費者物価指数(CPI)を翌日に控え、米株と短期債利回りが上昇。米ドル買いの流れから豪ドルは0.6974まで上昇した。14日、米CPIを控えて0.69台後半でのもみ合い推移が継続。注目の米1月CPIはインフレ圧力継続が確認され、米金利上昇に伴い米ドル買いとなると豪ドルは0.6942まで下落。但し、その後米債利回りが反転する動きに伴い米ドル売りとなると豪ドルは0.7029まで上昇し、0.69台に戻して推移。15日、豪ドルは0.6986でスタートし、ロウRBA総裁が上院公聴会で利上げが予想以上の消費支出を抑制するリスクがある一方で、利上げがまだ十分でない可能性があるとし、中銀が二面性のあるリスクに直面しているとの認識を示した事で、豪ドルが軟調に推移。NY時間に発表された米指標が堅調な内容となった事でFRBがタカ派対応をする懸念が高まり、米金利上昇と共に米ドル買いなると、豪ドルは更に下げ幅を広げ0.6865まで下落。引けにかけて米株が持ち直すと豪ドルは0.69台を回復。16日、豪ドルは0.69近辺で取引開始後、弱い豪1月雇用統計を受けて売りで反応し0.6869近辺まで下落。売り一巡後はすぐに買い戻されて上昇に転じたが、その後発表された米1月生産者物価指数が予想を上振れたことで米金利高・株安の展開となり、豪ドルは再び下落。複数のFRB高官が3月に+50bp利上げの検討を示唆する等タカ派的な発言をしたことも米ドル買いの動きを加速させた。豪ドルは一時0.6841まで下落した後、0.6880まで買い戻されて引けた。17日、豪ドルは0.6862でスタートし、0.6812まで下落して往って来い。NY時間では複数のFRB高官からタカ派発言があったものの、米株は押し目買いもあり引けにかけて下げ幅を縮めると豪ドルも0.68台後半を回復して越週した。

今週の豪ドル相場は、底堅い展開を予想する。米国の力強い経済指標の結果を受けて、次回FOMCにおける+50bp利上げに対する期待を背景に米金利が上昇し、米ドル買い地合いの中、今週の豪ドルは先週に続き上値重い展開を予想する。一方で、金曜日の豪下院議会での証言でロウ総裁はインフレ率を目標レンジに戻す為、追加利上げが今後数か月で必要になると委員会は見込んでいると示しており、豪ドルのサポート材料と考えられ、下値が支えられる展開となろう。今週は21日(火)に2月RBA会合の議事録要旨発表、22日(水)に豪10～12月期賃金指数が予定されている。RBAは賃金上昇率に注目しており、豪10～12月期賃金指数が大きな注目材料となる。市場予想値対比、強い結果となった場合はこちらも豪ドルの下値を支える材料となろう。

(3)先週までの相場の推移

先週(2/13～2/17)の値動き:　(対ドル) 安値 0.6812　高値 0.7030　終値 0.6879
(対円) 安値 90.70　高値 93.05　終値 92.28



(資料)ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。